

創業60年記念

## わたしが読んだ童心社の本

### 田常の ことばで 描き出す



宮川 健郎

みやかわ 喬一郎／児童文学研究者、武蔵野大学教授、大阪国際児童文学振興財団理事長。著書に、「現代児童文学の語るもの」(NHKブックス)、「物語もっと深読み教室」(岩波ジュニア新書)など。『全集 古田足日子どもの本』(全13巻・別巻1・童心社)編集協力。

「トトロは わくわくしていいんです。わくわくしていい」といは、こわいものが ふたつ あつまつ」——」  
「語りはじめる『おじいちゃんのぼうけん』のページを何回めぐったかじだれ。刊行当時、私は大学生だった。やがて、いまはもう成人したふたりの子どもにも読み聞かせる」となる。  
『おじいちゃんのぼうけん』が一〇〇万部を越えたニュースが流れたのは、五年ほども前だ。子どもたちに読まれつけられた魅力とは何か。それは、作品が散文的ないじば、つまり、田常のふつわのいじばで語られるところなのだ。田常のいじばが描き出すのは、田常のむすへの、ふしづわな世界なのだが。

日本の子どもの文学は、一九六〇年前後に「童話」から「現代児童文学」へと転換する。

小川未明の「童話」は、詩的で象徴的ないじばで心象風景を描く。それに対して、「現代児童文学」は、もつと散文的ないじばで、心の中の景色ではなく、子どももとうに存在の外側に広がっている社会と子どもの関係を描く。長い戦争をへたあとの子どもの文学は、もう「戦争」も、戦争を引き起しす」のある「社会」も書かないわけにはいかなくなってしまった。そうした新しい主題は、「童話」の詩的ないじばで書くのはむずかしい。新しい文体が必要になつて、「散文性の獲得」といふことがいわれたのだ。

そう主張したのが、一九五〇年代にまず評論家として仕事をはじめた古田足日だった。代表的な評論「わよなみの未明」(一九五九年)で、いじばの含意をして仕事をはじめた古田足日だった。代表的な評論強調する「童話」の表現を「呪術・呪文」と呼んだ。古田は、子どもの文学が詩的な「呪文」から抜け出

す「いじば」にちって、子どもたちにむけて新しい主題が書けると呼吸していたのだ。

古田は、『おじいちゃんのぼうけん』(一九七四年)で、田常の、あくまでふつわのいじばを積み上げる。それは、子ども読者の田常のいじばとも近しいものだ。

お昼寝前の保育室を走りまわって、みずの先生におじい中の反省をせまられたいじば、「おじいの そどで かんがえるよう」と問題提起をする。「やいなやん てを いなり」「おーくん がんばれ」——おじい中のふたりは、汗いつぱいの手で連帯する。ふつわのいじばは、子どもたちの行動をくつきりした輪郭で描く。

古田のいじばは、田畠精一の絵と繊密によつそい、ひびき合ひ、ねずみばあさんのくる、おじいの奥の世界での大冒險をありありと見えるように描き出す。未明童話のように、ふしづな雰囲気がかもし出されるところではないのだ。未明は、一つの語で意味やイメージをきゅーっと詰め込むから、長くは展開できず、すべては短編になる。古田のふつわのいじばを一つ一つ積み上げ、順々に語つていいくスタイルは、絵本としては異例に長いテクストを生むことになった。『おじいちゃんのぼうけん』は、古田の未完の大作「甲賀三郎・根の国の物語」(『全集 古田足日子どもの本』別巻所収)の「根の国」という地下世界の冒険とも重なつてくる。

「散文性の獲得」が「現代児童文学」の、そして古田足日の出発期の意志ならば、「おじいちゃんのぼうけん」は、それを見事に実現した傑作といえるだ。